

喘息コントロールと咳関連QOL，胃食道逆流症状の関連

白井敏博¹⁾，小川喜子¹⁾，美甘真史¹⁾，森 和貴¹⁾，宍戸雄一郎¹⁾，秋田剛史¹⁾，森田悟¹⁾，朝田和博¹⁾，藤井雅人¹⁾，須田隆文²⁾，千田金吾²⁾，
静岡県立総合病院呼吸器内科²⁾，浜松医科大学呼吸器内科²⁾

【背景と目的】Leicester Cough Questionnaire (LCQ)は咳特異的なQOL質問票であり，昨年日本語版が完成した（訳者：新実彰男先生，小川晴彦先生）。一方，胃食道逆流症 (GERD)はしばしば喘息と合併し，診断および治療効果の確認におけるFスケール問診票の有用性が知られている。今回，喘息コントロールと咳関連QOL，GERD症状の関連について検討を加えた。

【対象と方法】対象は当院に通院治療中で非発作時の気管支喘息患者132例（男性62例，女性70例，年齢中央値：60（17-81）歳。受診時に喘息コントロールテスト(ACT)，LCQ日本語版，Fスケールを実施し，患者背景，各種検査との関連について検討した。

【結果】ACTの内訳は，良好62例，不十分55例，不良15例であり，LCQ total score < 21は60例（45.5%），Fスケール ≥ 8 は29例（22.0%）であった。ACT scoreはLCQ total scoreと有意な正の相関 ($r = 0.524$)，LCQ total scoreはFスケールと有意な弱い負の相関 ($r = -0.328$)を認めたが，ACT scoreとFスケールは有意でなかった。また，ACT良好群は不十分および不良群に比し，有意にLCQ total score高値とFスケール低値を示した。一方，Fスケール ≥ 8 群は<8群に比し，有意にACTとLCQが低値であった。

【考察】3種の質問票を用いることにより，喘息患者における咳関連QOLおよびGERD症状の関連を評価することが可能である。